

古代イスラエルの王ソロモンの名は、今日でも「知恵」や「栄華」の象徴として用いられることがあります。事実、彼は権力を拡大し、栄華を極めることになっていきました。ところが、そんなソロモンでさえも、イスラエル王国を維持することは出来ませんでした。後に、王国は二分されていったのです。何故なのか。この列王記をまとめた「申命記史家」（イスラエル滅亡を目の当たりにし、敵国に捕囚されていた人達）の歴史観によれば、その要因は、ソロモンが神を捨て、神の目にかなう正しいことを行わず、自分の願いを叶えるために他の神々を伏し拝んでいったことにありました（11章）。聖書は、神の思いではなく、人間の思いが優先されていったことのなかに、滅びの要因を見出しているのです。

本日の箇所に記載されているのは、そんな、後のソロモンの姿とは対照的な、彼が即位したばかりの頃の初心が示されています。神から「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」と言われたソロモンは、こう答えました。「わたしは取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません。…どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるように、この僕に聞き分ける心をお与えください」。ある注解者は、この箇所の歴史的背景について次のように説明しています。「世の多くの王が『説き伏せる知』を求め…それによって治世を進めました。理詰めで攻められると、ごもつともですとは言いますが、必ずしも心服しないのが人情です。まして説き伏せるために権力を使われたりすると、人心は離れます。民意は反逆に向かいます」。それとは対照的に、自分のために長寿や富や敵の命を求めず、「聞き分ける知恵」を求めたソロモンの願いを神は喜び、知恵だけでなく、彼が求めていなかった富と栄光まで増し与えていくのでした。神からの知恵を願い求めること、それこそが治世を繁栄させたソロモンの知恵であったことを「申命記史家」達は振り返っています。しかし、やがてその権力が拡大していくと、ソロモンは、神からの知恵を尋ね求めなくなり、自分の知恵によって世を裁くことに酔い痴れるようになっていきました。

ヤコブの手紙1章19節には、「だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く」とあります。話すなということではありません。イエスの言葉を信じて従おうとすることに敏感であろうとするなかで、話す言葉やその思いを整えてもらうようにと促されているように感じます。「わたしは取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません。聞き分ける心をお与えください」…この神への祈りから語り直す者でありたいと願います。

